

神武殿
昭和四十七年初夏
大竹信利師範
天正書



成田市の天真正伝香取神道流・神武館で、大竹利典・大竹信利師範とともに記念撮影する三崎。

三崎和雄から香取神道流のことを聞いたのは、昨年、三崎が米国東海岸のヒカルド・アルメイダの道場から帰国したばかりの頃だった。

もちろん三崎自身は千葉県香取の生まれで、香取神宮が「出雲の国譲り」神話に出てくる武神・経津主神（ふつぬしのおおかみ）を祀っていること、境内に要石が置かれていたこと、室町時代中期に八代將軍、足利義政に仕えた武將・飯篠長威斎家直（いざさちょういさいいえなお）が、香取神宮の奥の宮に近い梅木山に籠り、一千日の修行の末、「天真正伝香取神道流」を創始した逸話などを知っていた。

当時、三崎は香取神道流について、あらたな事実を確認したようで、それがいつも日常的に参拝する地元にあったことに興奮を隠しきれなかった。

「香取神道流は、総合武術 だったんです」

そう三崎は目を輝かせて言った。

時代が進むにつれて、戦場の剣術から道場の剣術に移行していき、防具の開発研究、竹刀稽古が中心となっていた頃。常に戦国時代さながらの実戦を念頭に置き、剣術、居合術、槍術、薙刀術、手裏剣術、棒術、柔術、築城術などいわゆる武芸十八般とも呼ぶべき総合武術を志向していたのが、香取神道流だったという。

「まさに、何でもあり ですね」

そう返すと三崎は、さらに不思議な縁を教えてください。

「アメリカへ出稽古に行ったときに、ヘンゾ（グレレイシー）に香取神宮で祈禱してもらったお札を持っていったんです。ヘンゾは『これが戦いの神様か』と喜んでくれて、僕が香取神道流にはいろんな武術があると話す、すでにヘンゾは足利義政のことも、築城術のことも知っていたんです。アルメイダも武士道に詳しいし、グレレイシーは、ほんとうの意味で武術の本質をつか

[4・22 DEEP 53 IMPACT 10th Anniversary]

DEEP参戦

天真正伝香取神道流 師範

三崎和雄×大竹利典

「香取の“極意”は、生きることにあり」

千葉県香取出身の三崎和雄にとって、地元の香取神宮は、飯篠長威斎家直が一千日の厳しい修行の末、悟りを開き、「天真正伝香取神道流」を創始したことで知られる神聖な場所だった。その家直の“秘伝”を、約600年間、門戸を閉ざし、二十代にわたり、連綿と伝えてきた流派があるという。剣術、居合術、槍術、薙刀術、棒術、柔術、築城術など、“総合武術”とも呼ぶべき香取神道流の、唯一の極意皆伝者である大竹利典師範を訪ね、三崎は成田の道場へと向かった！

武の世界、再び。

松山 郷=文
text by Matsuyama Go

林 和也=写真
photographs by Hayashi Kazuya



Misaki Kazuo 1976年(昭和51年)4月25日、千葉県小見川町(現香取市)出身。中、高、社会人と柔道を経験し、01年にバンクラスでプロデビュー。06年、PRIDEウェルター級GP優勝。10年8月、ジョージ・サンチアゴとの5Rにわたる死闘が、海外で年間最高試合に選ばれる。晦日のマイク・シール戦で1RTKO勝利。MMA戦績23勝11敗2分1NC、178cm、83kg。フリー

Otake Risuke 1926年(大正15年)3月10日、千葉県成田市官林(旧香取郡)出身。1942年(昭和17年)、16歳で総合武術である天真正伝香取神道流・林弥左衛門家直氏に入門。現在まで69年間、修行を続ける師範。1960年、香取新道流が千葉県無形文化財に指定され、その保持者となる。2005年(平成17年)、春の叙勲にて旭日双光章を受章。

若き日の大竹師範。予備動作なく、両足を畳んだ状態から跳び上がり斬り付ける香取の居合「抜刀之剣」だ。暗闇の中で襲撃されることも想定されている。



もうとしているんだな、と感じましたね。彼らは日本人よりよほどサムライらしい」

アルメイダの道場で、UFCライト級王者のフランク・エドガーともスパーリングをした三崎は、グレイシーの根底に流れる心の拠り所のようなものを感じたという。

「彼らは、すべては道衣なんだ、と。ミサキは柔道をやっていただけだから分かってるだろう？」と言います。グレイシーがグレイシーたる所以は、道衣を着ることによって強さが生まれるからだ。ノーギはスピードとパワーが要求されますが、道衣を着るとそれらはほとんど使えない。だから子どもからお年寄りまで幅広くゆっくりやれるし、その中で駆け引きは将棋みたいなもの。手順を踏まないと前に進めない。そこが通底する、同じ志を持った人間が集まると、パワーは凄いのになる。

彼らは柔術が生まれた日本の文化やスピリッツをすごく大事にしているんです。それは彼らのルーツでもあるから。人は生まれた時から死ぬ時まで、戦いに行く時も刀で斬る時も「ギモノ」を着ている。だから根本に道衣があるという考え方は、彼らにとって自然なことなんです。

グレイシーは、ライフスタイルのなかに柔術がある。それはまさしく武芸十八般という生活のなかに武術がある香取神道流と共通するものがあるのではないかと。

競技柔術全盛のなかで、護身とは何かを考え続けるグレイシー。一方、「相手の攻撃に対し一瞬早い攻撃により必ず倒す。すべての技に『一撃必殺』の工夫がなされ、稽古では木刀を使い防具は着けない。常に死を考えて行なう」という香取神道流。

その本質に触れるため、香取神道流唯一の「極意皆伝者」である大竹利典師範を訪ねるべく、成田の神武館へと向かった。

「凄、耳をしていますね、鍛錬されている

世界で勝つヒントは、身近なところにあるのかもしれない(三崎)



A. 香取神宮を参拝してから、成田市の神武館に向かった三崎。香取神宮では、B. 飯塚長成宮家直の墓参りも行なった。C. 神武館では、極意皆伝者である大竹利典氏をはじめ、大竹信利、京増重利師範らが、特別D. 居合、E. 表の太刀、さらに裏の太刀、F. 轉術、G. 薙刀(長さに注目)、H. 二刀、I. 小太刀、などを披露。映画「用心棒」でも使用された居合での「逆拔之太刀」、鎧兜を想定した大きく力強い表の太刀、「崩し」と呼ばれる相手の太刀を受けず、かわしながら太刀を入れる動き、鎧の弱い部分を狙い、動脈を斬る太刀など、さまざまな秘伝を公開していただいた。室内では、J. 秘技「燕返し」のさわりも美演!

証拠です」

三崎の潰れた耳にすぐに目がいった利典師範。最初は、京増重利師範が、中腰の状態から、予備動作なく跳躍し抜刀する居合から解説いただいた。

「暗闇のなかで相手の気配に気付いた時、体勢を低く前を向いたまま後ろ手で配置してある刀を手にとり、足を斬られないよう、一気に跳び上がり斬り付けます。パネを使ってタメて跳んでは、相手に悟られてしまうため、このような動きになります」

その後の「表の太刀」は、柄頭いっぱい木剣を持つ。「八寸の柄に理あり」と言われ、テコの原理を最大限使って剣を扱う。ボクシングで相手の肩の動きでパンチを計るように、極意では、相手の右拳の動きに注意し、剣先を察知する。

圧巻は「崩し」と言われる太刀。信利、京増師範ともに「表」とは打って変わってガツチリ受けず、刃こぼれする実戦を想定し、かわしながら太刀を入れていく。もともと「表」は秘伝を盗まれないための動きを組み込んだものであるという。

「受ける間があれば斬れ」が極意で、甲冑の構造を熟知し、その弱点を突きながら動脈に太刀を擦り込む。ときにあえて隙を作って誘い、かわしながら斬る。動きに無駄が無く、まさしく攻防一体の太刀筋だ。かかとを床につけているのも、甲冑の重さを想定してのものだという。

「私たちは一本、一本、ここで死んだ、ここで死んだと想定をしています」

香取は防具なしの剣術だ。代々、他流試合は禁止されているとはいえ、戦わざるをえない状況になったことはないのだろうか。「この総合武術が、六百年間そのまま密かに残されていることを知った呉が、無形文化財を検討しているときに、審議委員会の先生から、『神道流って何だ? 武道なら剣道の高段者と試合をさせる』と言ってき

たことがありました。神道流では代々、他流試合は禁止されていましたが、林弥左衛門先生が、「せっかく神道流が世の中に広く紹介されることになるのだから、試合に応じようか」と申され、「それにはまた君にご苦労をかけるがやってくれ。相打ちでも勝てる極意がある。今晚、こちらに来るように」との電話がありました。

座敷でお待ちになっていた先生は、その場で私に木刀を持たせ、「面を打ってきなさい」と言いました。言われたとおり打つと、先生はスッと私の左前に出て、横面を打ってきました。これは、香取の『奥の極意』で間合いが遠くても近くても、相手の左前に入り、左首、左横面を打つものでした。相手は剣道なので、竹刀で防具をつけてきますが、こちらはいつものとおり、素面素小手、木剣で臨むつもりです。この『奥の極意』で打ったら、面の上からでも相手は死んでしまいます。しかし、先生はそれをも考え抜いての命令でした。

その日を持ちながら、私はこう思っていました。「本当に強く打てば相手は死ぬ。しかし、もし自分が負けた時は、六百年の神道流の伝統に傷が付く。流祖をはじめ多くの先人たちに申し訳が立たない……負けたら死ぬしかない——」こう覚悟しながら、しかし、不思議と悲壮感はありませんでした。その後、県から「もし生死に関わる事態になったら責任を取れない」との連絡が入り、手合わせは実現しませんでした。

世界のどこの民族にも己を守り、郷土を守るための格闘技があります。武術では終始一貫して一撃必殺の稽古に励みます。実戦的ではない武術などあるはずもない。同時に強靱な精神力も求められます。しかし、その強さを表に表したら、暴力になってしまふ。『熊笹の対座』が示すように、相手が戦う意欲を失って引き下がらるくらいに、師は弟子に何かを伝えるとき、その教えを

負けたら死ぬしかない——不思議と悲壮感はなかった(大竹)

武の世界、再び。



施すだけの裏打ちされた努力、実践をしていくのが問われていると思います」
利典師範の生きる術には、驚愕するしかない。居間に移動し、解説いただいた陰陽五行説や、築城術、軍配法は、呪術的な側面よりも、自然のなかで、いかに生きるかの智慧のように感じる。

なかでも築城術では、針と糸だけで百分の一スケールで、曲尺を利用した大和三角形により、方位術も考慮し寸分の狂いも無く線を引く。あるいは松の木を石垣の基礎として使う場合は、平行した2面のみ川肌を残すだけで強度が増すのだという。道場も含めた、大竹家の設計図は利典師範が自ら作成したものだ。

「兵法のなかに含まれる法事は迷信に過ぎない、という学者もいますが、地球が自転しながら太陽を巡ることを考えれば、我々がいる地球そのものが、ほかの星の影響を受けていてもおかしくない。月の引力による潮の満ち引き——教えでは、波浪は1分間に十八回寄せているといわれています。人の呼吸も1分間に十八回。その倍の三十六が人間の体温。その倍の七十二回が、一分間の心臓の脈打ちの数だと。『不思議』というのは、それが実際に起こるから、その言葉が存在するのだと思います」

* 三崎選手、実際に香取神道流の技をご覧になってどんな印象を持ちましたか。

「香取に生まれて、香取神宮にお参りし、独学で神道流のことを調べて、飯篠長威斎家直が山籠りしたという場所を想像して、いつか自分もやってみようと考えている僕にとつて、自らのルーツを探るような体験でした。大竹師範に話を聞くと、まだまだ知らないことが山ほどあるし、むしろ書物に書かれていないことの方が多いのではないかと思いますね」

— 実際、最近に至るまで600年間、固

く門戸を閉ざしてきた秘伝だったそうです。「極意」と仰ってましたね。型にも実は表と裏がある。実戦を想定しながら、一方で「兵法は平法なり」として、戦うことを厳しく戒めている。兵法は平和のための法であって、戦わずして勝利を得ることが最上である」と

「戦わないために強くあろうとする。それゆえ稽古に、奥」がある。深いですね。「短い時間でしただけ、普段見ることが出来ない型も披露してもらい、大竹師範と直に向き合わせていただいたことはとてもいい経験でした。鏑迫り合いというのか、相手の刀の反りに滑らせるようにして斬る。ほんのちよっとの微妙な動きですけど、すべてに意味がある。相手が刺してきたら避けられない。自分が刺しに行くと突かれてしまう。そこに力はほとんど関係なかったですね。間合いと動き。どうしたらいいのかな、と正直戸惑いました」

小太刀と通常の長さの刀と、動き次第ではそれほどリーチは変わらないというのは目から鱗でした。

「あれは総合格闘技だったらどうすればいいのかと考えましたね。リーチのある外国人選手と対したときに応用できないかと。近い距離で組み合っているときは力の勝負の割合が大きく、遠く離れば間合いの技の勝負になると。不利だと思っていたことが実はそうではないと思ったら、興味深いですね」

通常の「表」の型と、型に隠して盗まれないようにした「崩し」がある。

「通常のように相手が大きく振りかざしたとき、相手が攻めてきたときに一番のチャンスだと仰ってましたね。実際にあやつてかわして斬る、最小限の小さな技で捌く動きは参考になりました。「崩し」で地味に相手の手首や足を斬るのも合理的でしたね。一生、勉強なんだなと思いました」

「受ける間があれば斬れ」——神道流の型稽古には、もっと深い「奥」がある(大竹)



モノクロ写真は、香取神道流の柔術の一部。K、腕輪を相手の腕の内側から外す護身術は、グレイシー柔術でも紹介されていたもの。L、片腕を相手の両手で引っ張られた時の対処も合理的だ。大竹師範は、M、アントン・ヘーシク氏の武道の先生でもあったドン・ドレーガー氏に最初の免許を与えている。N、道場には数多くの外国人門下生の札がかけられていた。香取神道流の「総合」たる別のパートが、兵法と融合した遁甲術だ。O、法事とも呼ばれるこれらの気学では、九星学や陰陽の消長、五行の相剋などを用い、築城も行なう。大竹師範は、針と糸だけで曲尺を利用した大和三角形による築城術を駆使し、なんと道場と自宅の設計図を作成している。

札を見ると門下生に多くの外国人が名を連ねていましたね。キヤノンラグビー部のコーチもいました。

「柔術のように、日本の古武術が海外でも認められることは嬉しいですが、その反面宝物が流出しているようで寂しい気もします。やはりこれは日本人が受け継がないといけない。アルメイダたちも柔術を「これはもともと日本にあったものだ。日本に戻さなくてはいけない」と言っていました。

今、総合格闘技では、海外で日本人選手が苦しんでいます、世界と勝つためのヒントは、もしかしたら自分の身近なところにあるのかもしれないと感じました」

なるほど。さて、4月22日はいよいよDEEP凱旋です。国内の格闘技の様々な状況から選択されたことでしょうか。

「僕にとっては、自分が戦いたいと思う相手であればどこでも構わない。小路選手とは、06年にDEEPで戦っていますが、あの試合は、PRIDEに上がる日本人の最後のひと枠を争う査定試合でした。あの時僕がたまたま勝って、その後のPRIDEウェルター級GPや秋山成勲選手との試合に繋がっていった。あの一戦があったからこそ、今の自分があるのは間違いないです。実は、僕が戦極に上がり始めた頃、僕と小路選手と高田延彦さんとほか数人で食事をする機会に恵まれました。そこで高田さんから、「小路の最後の、引退試合の相手はお前しかいない」と指名されたんです。当時、僕にはいろいろな契約が残っていましたが、「こちらからお願いでいいから、僕にやらせてください。ただ、今すぐには出来ないで時間をください」と返答させていただきました。

その後、まだ身動きができない状態だったんですが、実は佐伯さんとも話をさせてもらいました。「あのDEEPでの小路選手との一戦が無ければ、今の僕はありませ

ん。DEEPという舞台に対しても、それを作ってくれた佐伯さんという人に対しても自分はすごく感謝しています」と。どうしても想いだけは伝えたくて……

「そういえば07年大晦日の「やれんのか!」秋山戦では、DEEPのファイターパスを持ってきていたんじゃないですか?」

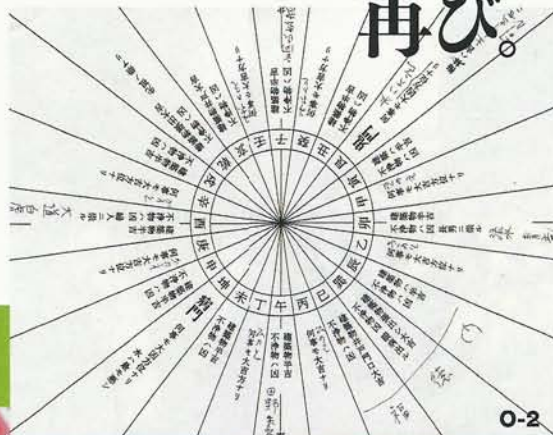
「……あの試合のファイターパス、今でも必ず試合会場へ持っていつてるんです。あの小路選手との試合があったから、今、自分は生き残れていると思っっているの、あのDEEPのパスを手離すことはできない。僕はDEEPの選手だと思っっていますから、だから、あの時、佐伯さんと話して、「小路選手のラストマッチの相手として自分を選んでもらえるなら、ぜひやりたい。そのカードはほかではなくてDEEPのリングでお願いしたいんです」と伝えていました。その返事は「いったん保留になっていましたが、今年に入ってあらためてオファーをいただくことができて、佐伯さんから「やれるか?」と聞かれて、「ぜひ」と即答しました。このことはSRCにもちゃんと説明して、ご了承いただいたので、4月、僕はDEEPに出場することが出来ます」

「あらためて小路鬼という格闘家はどんな印象でしたか?」

「特別な存在でした。僕が総合格闘技でプロデビューする前、わずか4人の素人集団で地元のプレハブ『香取道場』で練習に明け暮れていた頃、小路選手はすでにPRIDEに参戦して、ヘンゾと引き分け、マーク・コールマンと無差別級で戦っていました。『俺もこんな男になりたいな』と憧れの存在でした。それがまさか、2006年に自分が戦うことになるなんて想像も出来なかった。当時、『最後の日本男鬼』と呼ばれていましたよね。『俺もそう呼ばれるようになりたい』と、強く思っていましたね」

小路戦があったから今の自分がいる。今回は“あの人”に立ち会ってもらいたい(三崎)

武の世界、再び



1.米国で2010年の年間最高試合賞を獲得したサンチアゴ戦。今年、三崎は好敵手を米国まで追いかけるつもりだ。2.4月22日のDEEP53 小路昇引退興行では、2006年2月5日以来、約5年ぶりに後楽園ホールに凱旋する。3.“男の中の男”対決とも呼べる三崎vs小路戦に、両者は高田延彦氏の立ち合いを希望している。



三崎との対談では、P.護身の呪術でもある「九字」も披露。Q.一つひとつ手書きの目録には、人体の急所が記されていた。



Q-1



Q-2



P-2

P-1

小路選手も、「最後にけじめの試合を三崎選手とやりたい」とずっと思っていた。あの時、すべてを出し切れなかったことに悔いが残っている。最後に出し切りたい。三崎選手とだったら気持ちも沸く。会見で「介錯してくれ」と言ったのは、殺してくれということではなく、すべて出し切るの、すべてを受け止め、現役に未練がないようにスパッと受け止めてくれ。もちろん、勝ちに行きます」と語っています。

「……試合では何が起きてもおかしくありません。小路選手にきっちり引退してもらわなければならない。完璧なコンディションで、過去最高の状態で臨むつもりです。すぐに終わらせるつもりで、秒殺で『これで心置きなくバトンタッチしてくれ』という気持ちでいこうと思います」

さらに、三崎選手は「その後」に繋げなくてはならないんじゃないですか?」

「そういえばジョルジ・サンチアゴもUFCに行っちゃいましたね。彼とは香取新道流のように、斬るか斬られるかの死合をしてきたので、どんなにいい試合だったと周囲に評価されても、終わってみれば悔しさしか残ってない。サンチアゴが日本から出てしまったら、追いかけるしかないです。今日の試合でダン・ヘンダーソンもフェイジャオンに勝ったんですからね。ストライクフォースにはジャカレイもいるし、ほかにやりたい選手がいる。今、自分は試合を待っている立場じゃないので、逃げられたら追いかけていくだけです」

「そのためにDEEPできっちり勝つ必要がありますね。小路選手も今は、高田道場と吉田道場で練習しているようです。あの時代に区切りをつけるためにも、出来れば、発端となった「あの人」に見届けてもらいたいんじゃないですか?」

「そうですね……高田さんが立会人になってくれるのなら、ぜひお願いしたいです」